

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：34406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24760519

研究課題名(和文)近代建築史における カウンター・モダニズム 解明の試み ピキオニス研究を通して

研究課題名(英文)An Attempt to Elucidation of "Counter-Modernism" -- through a study on the thoughts and works of Dimitris Pikionis

研究代表者

朽木 順綱 (KUTSUKI, Yoshitsuna)

大阪工業大学・工学部・准教授

研究者番号：50422994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、西欧主要国を基軸とした既成の近代建築解釈に新たな視点からの再読を試みるものとして、周辺国における近代主義の批判的受容のありようを解明することであり、いわば発展性や新規性を命題とする正統モダニズムとは対照的に、受容力や穏健さに基づく、カウンター・モダニズムのありようを明らかにすることである。本助成による研究期間においては、ギリシアの建築家ディミトリス・ピキオニスの思想と作品に関する分析、考察を進める計画であったが、文献や作品集の資料収集は概ね完了したものの、近年の欧州における経済、治安情勢の悪化などのため、現地調査を十分に実施できず、研究としては課題を残す結果となった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to reinterpret the established acknowledge about movement of modernism developed in main countries in Western Europe from a new viewpoint that may be able to elucidate the another acceptance of modernism in neighboring countries. This critical attitude to "orthodox" modernism can be named "counter-modernism" which is based on the concept of inclusiveness and moderation as contrast with evolvability and novelty. In this research period, analysis and investigation were planned about thought and works of Greek architect, Dimitris Pikionis. However sufficient level of research materials have been collected, indispensable on-site investigations have not been accomplished because of serious situations of economy and public safety in Europe. In these circumstances, some challenges have remained untouched and on-going after this priod.

研究分野：工学

キーワード：ディミトリス・ピキオニス ギリシア カウンター・モダニズム 建築論 場所論

## 1. 研究開始当初の背景

建築における20世紀とは、当時の社会構造や産業構造の劇的な変換にともなう、過去に例を見ない変革を遂げた時代であり、それ以前とはまったく異なる時代精神に基づいた時代であったといえることができる。このような時代精神を牽引したのが、「新規性」や「変化」、「国際性」などの概念であり、これらに伴い、アール・ヌーヴォーやゼセッション、インターナショナル・スタイルなどの数多くの建築運動が勃興したことは周知の事実である。すなわち、20世紀のモダニズムとは、過去からの分離、訣別という否定的契機を出発点とすることによって、自らの変革性、発展性を専ら存在理由とすることが宿命づけられたといえることができるであろう。しかし世紀の転換を経た現在、ややもすると急進的な革新を想定しがちであった従来のモダニズムにおける変化、拡張、成長の概念は、地球規模での環境問題や、我が国をはじめ先進諸国で取り込まれつつあるコンパクトシティ構想、持続可能型社会の構築など、今日より穏健的で安定的な持続性、縮小可能性、成熟などの概念へと転換しつつある。

建築思想史におけるこうしたモダニズム再考の動向は、すでに1950年代にその萌芽を認めることができる。未曾有の戦禍ののち、世紀の後半にさしかかる時代背景のなかで、CIAM(近代建築国際会議, 1928-1959)に代表される建築運動はその英雄性や国際性が反省され、各国固有の風土に根ざした匿名性や地域性が重視されるようになる。こうした近代建築への批判的な視点は、昨今の建築史研究においても新しい動向として重視されつつあり、いわゆる発展的歴史観によっては必ずしも注目されなかった潜在的な事象や、時代の趨勢を受容するようにして衰えてゆく様式などが、むしろ歴史上では新たな価値観の萌芽を逆説的にもたらしているという今日の史的ダイナミズムへの関心と連動するものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、上述の背景に基づき、モダニズムの雄弁さの裏面に伏在する沈黙の史的事象に注目し、これをモダニズムに對置されるべき〈カウンター・モダニズム〉として見定めることで、いわゆる巨匠たちによる既成の歴史に彩られた近代建築史に並行する、もうひとつのモダニズムの実相の解明を試みる。これにより、批判的態度によって見出された、新しい歴史観の獲得をめざすものである。

具体的には、本研究で見定めるべき〈カウンター・モダニズム〉のきわめて早い先駆者として、建築家ディミトリス・ピキオニス(Dimitris Pikionis, 1887-1968)の業績を取り上げ、その思想と作品の分析を行う。ピキオニスはル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエらと同世代でありながら、かれら巨匠たちが引き受けたようなモダニ

ズムの国際的主導者となることなく、母国であるギリシアでの活動にとどまり続けた。ジョルジョ・デ・キリコら近代芸術家との交流を経たのちにかれが建築作品として具現化したものは、単純なモダニズムの系譜に位置づけることが困難な作品が多い。その代表的なものとして、「アクロポリスのランドスケープ計画」および「セント・ディミトリス・ロンバルディアリス教会」(図1および図2, 1951-1957)や、「フィロセイの児童公園」(1960-1965)などを挙げることができる。これらの作品では、いずれもギリシアに古くから伝わる舗石のパターンや建築構法などが、近代絵画の見出した新しい視覚表現のもとで再構成されている。とりわけアクロポリスの作品では、世界でもっともよく知られた歴史遺産の見学ルートを新たに計画したものでありながら、もはや表層的な近代性は捨象され、もはや20世紀の作品であるという印象すら期待されていない。すなわち、ピキオニスの作品においては、モダニズムはあくまで形態の背景に隠されることによって逆説的に堅固に継承されるという、同時代の近代建築とはまったく反対の方法が先駆的に主題化されているのである。本件研究ではこうしたモダニズムへの潜在的応答のありかたを〈カウンター・モダニズム〉の事例として取り上げることで、上述の新しい歴史観に向けた知見の獲得をめざすものである。ピキオニスの思想と作品についての国際的評価は、建築史家ケネス・フランプトンによる論者が数件見られるほかには、その重要性を指摘するものは少ない。モダニズムの主要国からみたギリシアという地域的、文化的、言語的な懸隔がその要因と考えられるが、むしろそれゆえに、モダニズムへの反省的視点にたつ本研究の主題には適した対象でもあるといえる。本研究では国際的にみても萌芽的な取り組みとして、ピキオニスの作品および思想についての基礎的研究に着手する。研究方法は本研究がこれまでに確立してきた方法を援用し、徹底した言説解読と、作品の制作過程についての図式的解明を行う。



図1(右) アクロポリスのランドスケープ計画  
図2(左) セント・ディミトリス・ロンバルディアリス教会

(両図とも筆者撮影)

### 3. 研究の方法

本研究は、ディミトリス・ピキオニスの建築思想と作品について、以下の2つのアスペクトからなる方法によって分析、考察を行うことで、近代建築思想史を包括的に再解釈すると同時に、建築家の思想の独自性についての解明を進め、これらの重層的探求を試みる。

〈方法A〉近代建築に関わる基礎的資料の収集、分析——〈カウンター・モダニズム〉への問い

モダニズム主要国における建築思潮を改めて確認するとともに、これを受容し応答する史的運動としての〈カウンター・モダニズム〉の萌芽的事象について、歴史的、思想的解釈を行う。具体的には、ピキオニスと同時代のモダニズム主要国における建築思想の展開について改めて知見を獲得するとともに、近代芸術や近代哲学についての文献を収集し、包括的な時代背景の理解を深める。とりわけピキオニスが交流をもったデ・キリコについての資料や、同じくピキオニスが画家を志す契機となったセザンヌらによる近代絵画に関する資料から、本研究における背景的知識の獲得を図る。また、20世紀後半において近代建築の批判的継承を主導した建築家アルド・ファン・アイクによるピキオニスの評価から、ピキオニスの今日的意義を見出す手がかりを得る。

〈方法B〉：西欧周辺国とくにギリシアにおける近代建築思想の解明——ピキオニスの思想と作品への問い

モダニズムの草創期から展開期にかけて独自の活動をおこなったピキオニスの思想と作品についての考察に着手し、本研究におけるひとつの定点の獲得を試みる。ピキオニスの資料は数点の書籍を除き、ギリシア国内に限られた出版物である。またその発行部数も限られており、国外での入手は困難であることが多い。研究に着手するにあたり、ピキオニスが教職を得た国立アテネ工科大学や、ピキオニスのドローイング等を数多く収集するベナキ美術館など、各アーカイブへの現地訪問を実施することにより、資料群の全容解明を行うとともに、それらの収集を行う。また、作品については、上述の研究目的として挙げたもののほか、ギリシア各地に残っている小学校やホテルなどがあり、これらについての現地調査を行うことにより、いわゆるインターナショナル・スタイルが多く取り入



図3 「ロダキス・ハウス」(筆者撮影)

れられることの多いビルディング・タイプにおいて、ピキオニスがどのように地域性や伝統と近代主義との調停を図ったのかを明らかにする。さらに、ピキオニスエーゲ海のエギナ島において「清貧」なる生活の具現化として見出した民家「ロダキス・ハウス」(図3)の現状についても調査を行う。

### 4. 研究成果

〈方法A〉に示したとおり、ディミトリス・ピキオニスの今日的意義を確認するため、20世紀後半の近代建築運動を主導したアルド・ファン・アイクの建築思想によるピキオニス評価や、これに関わる諸概念の分析を行った。ファン・アイクの論考を解読することによって、近代が獲得した空間経験における主体性の限界を克服しうる、外部性への「開け」や「超越性」を鍵語とした前-主体性、あるいは主体に絶対的に先行する他者性へ向けての、遡行的視座を獲得することができた。このことは、いわば西欧の近代建築主要国からみた「他者」としてのギリシアなどの周辺国との遭遇や、あるいは、近代建築を受容する各国内における近代性と、その「他者」としての独自の伝統との和合などの問題に重ねあわせて理解することができる可能性を示していると考えられる。

また、〈方法B〉による研究の成果としては、ピキオニス関連の資料収集が一定の水準に達したことを挙げることができる。ピキオニスの資料は数点の書籍を除き、ギリシア国内に限られた出版物である。またその発行部数も限られており、国外での入手は困難であることが多いが、現地古書店や博物館との連絡を経て、ピキオニスの論考集やスケッチの図録などを入手することができた。これらの資料に基づき、現在、かれの思索の基本的な構造や作品の所在についての詳細な情報を把握するに至っている。そのうえで、ピキオニス教職を得た国立アテネ工科大学や、ピキオニスのドローイング等を数多く収集するベナキ美術館など、各アーカイブへの現地訪問を実施する計画であったが、昨今のヨーロッパ各地の経済、治安情勢の悪化により、現地への渡航計画を何回か断念せざるを得ない状況が続いた。研究期間を延長してさらなる渡航の機会を待ったが、十分に条件が整わず、現地調査を断念せざるを得なかった。

いくらかの課題を残す結果となったが、本研究の一環として、近代建築における様々な思索の方法を概観し、整理する作業については継続的に取り組んだ。近年刊行となった建築論の概説書の邦訳作業は、その成果のひとつである。建築と哲学的思索との関わり合いや、建築における言語の作用、建築の歴史の意義などについてあらためて理解を深めることによって、建築思想を別の分野の視点から再解釈するという、〈カウンター・モダニズム〉の本質といえる、モダニズムの相対化へとつながる知見を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

[雑誌論文]

- ① 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想における時間概念について——「経験」の構造に関する分析を通して, 査読あり, 日本建築学会計画系論文集, 第77巻第676号, 2012.6, pp.1489-1498

[学会発表] (計5件)

- ① 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——マーク・ストランドによる詩「ルーム」への関心について, 日本建築学会大会学術講演会, 2014.9.13, 神戸大学(兵庫県・神戸市), 梗概集・F-2, pp.575-576
- ② 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——後期思索とマーク・ストランドによる詩「ルーム」との関わりについて, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2014.6.21, 大阪工業技術専門学校(大阪府・大阪市), 研究報告集第54号・計画系, pp.857-860
- ③ 朽木順綱, ル・コルビュジエ: 身体/空間, 連続レクチャー「建築の20世紀」(招待講演), 2013.11.28, 坂本昭・設計工房 CASA(大阪府・大阪市)
- ④ 朽木順綱, 森重幸子, バリ・ウブドの家——裸形の建築への遡行として, 日本建築学会建築デザイン発表会(北海道), 2013.8.31, 北海道大学(北海道・札幌市), 梗概集(建築デザイン), pp.1-2
- ⑤ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——アテネ回顧展におけるD.ピキオニスへの関心について, 日本建築学会大会学術講演会, 2012.9.13, 名古屋大学(愛知県・名古屋市), 梗概集・F-2, pp.421-422

[図書] (計6件)

- ① 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想にみる都市的なるもの——後期思索における「開け」の意味, 建築論研究会(加藤邦男, 中村貴志, 西垣安比古, 川本豊, 藤原学, 杉山真魚, 田路貴浩, 山中冬彦, 田中明, 真木利江, 笠覚暁, 下川勇, 市川秀和, 白井秀和, 迫田正美, 今村友里子, 熊澤栄二, 小野育雄, 朽木順綱, 田崎祐生, 近藤康子, 西村謙司, 崔康勲, 千代章一郎, 水上優, 前田忠直) 編著, 『建築制作論の研究』所収, 中央公論美術出版, 2016, 担当頁 pp.431-458. 総頁数 626
- ② 朽木順綱, もうひとつの京都建築スクールほか, 京都建築スクール実行委員会(阿部大輔, 池井健, 魚谷繁礼, 朽木順綱, 阪田弘一, 田路貴浩, 松岡聡, 松本裕,

八木康夫, 浦谷健史, 大野秀敏, 嘉名光市, 文山達昭, 村橋正武, 山崎政人), 京都建築スクール2015 リビングシティを構想せよ [公共の場の再編], 建築資料研究社, 2015.12, 担当頁 pp.27, 28-37, 95, 131-133, 総頁数 144

- ③ 朽木順綱訳, コリン・デイヴィス著, 建築について考えるときに大切な8つのこと, 丸善出版, 2015, 総頁数 180
- ④ 朽木順綱, 都市の背骨ほか, 京都建築スクール実行委員会(阿部大輔, 池井健, 魚谷繁礼, 朽木順綱, 阪田弘一, 竹内泰, 田路貴浩, 松岡聡, 松本裕, 八木康夫, 浦谷健史, 角野幸博, 川合智明, 文山達昭, 山崎政人), 京都建築スクール2014リビングシティを構想せよ [居住の場の再編], 建築資料研究社, 2014.12, 担当頁 pp.26, 28-37, 総頁数 136
- ⑤ 朽木順綱, 拡張する交換の尺度ほか, 京都建築スクール実行委員会(阿部大輔, 池井健, 魚谷繁礼, 朽木順綱, 阪田弘一, 竹内泰, 竹口健太郎, 田路貴浩, 松岡聡, 松本裕, 八木康夫, 米田明), 京都建築スクール2013リビングシティを構想せよ [商業の場の再編], 建築資料研究社, 2013.12, 担当頁 pp.18-27, 57, 67, 総頁数 143
- ⑥ 朽木順綱, 註記, 岸和郎著『重奏する建築 文化/歴史/自然のかなたに建築を想う』所収, TOTO 建築叢書, TOTO 出版, 2012, 担当頁 pp.47-48, 75-76, 107-108, 139-140, 167-168, 215-216, 263-264, 307-308, 327-328. 総頁数 335

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
朽木 順綱 (KUTSUKI Yoshitsuna)  
大阪工業大学・工学部・准教授  
研究者番号: 50422944
- (2) 研究分担者  
なし
- (3) 連携研究者  
なし